

薬物依存、支え合い克服へ

更生支援施設「山梨ダルク」の29人



自らの半生をノートに書き込む入所者。グループセラピーを通じて毎日、薬物依存と闘っている＝甲府市伊勢4丁目

「今日を頑張れば変われる」

覚せい剤取締法違反の罪に問われ、9日、東京地裁から懲役1年6月、執行猶予3年の有罪判決が言い渡された元女優井手子被告(38)の事件は、ファンをはじめ多くの国民が衝撃を受けただけでなく、薬物汚染の広がりや印象つけた。薬物事件は再犯率が高く、依存症からなかなか抜け出せないといわれる。薬物依存者の回復を支援する山梨ダルクでは現在、29人が仲間と支え合いながら日々を過ごしている。「もう昔に戻りたくない」「今日を頑張れば進歩できる」という気持ちを胸に、毎日のように必死に薬の欲求と格闘する入所者の一日に密着した。〈渡辺 浩人〉

入所者は薬物との関係を断ち切るため、全員が異外出身者で、市内の家で共同生活している。一日は午前8時の起きは「朝の1発」で目覚め、

やる気が出たところ打ち明ける。覚せい剤をやめて3年になるが、今も朝起きると欲しくなるという。

依存者の欲求を抑えるのは、ミーティングと呼ばれるグループセラピー。同市伊勢4丁目本部に集まり、同10時半からテーブルを囲んでテーマに沿って不安や回復に向けた決意を話し合う。ルールは二つで、話し手は正直に話す、聞き手は質問や意見をしないことだ。この日は、今の気持ちについて語り合った。50代の男性は「自分は弱い人間なのに強がってしまい、素直に『ごめんなさい』ができなかった」と過去を振り返り、「今日を頑張れば、自分は変われる」

と力強く語った。午後9時のセラピーでは、自らの半生をノートに書き込んだ。ある40代の男性は、覚せい剤と知らず使用した経緯をつづつた。「体が楽になる」「疲れがとれる」。先輩からの勧めがきっかけだった。初めて逮捕されたころは友人からも心配されたが、3、4回と刑務所に入っていくうちに、知人はもちろん、家族も離れていった。寂しさから出所後、また薬に手を出す悪循環に陥ったという。

佐々木広施設長は、ミーティングの効果について、薬物から脱却したいという共通の目標を持つ仲間の話を聞くことで自らの意志を強めるとも、聞いてくれる仲間がいることを再確認、孤独感からくる薬物の欲求を抑制するといふ。「ノートに半生を書いて、自らが薬物依存症であることを自覚することも大切だ」と強調する。ミーティングを終えた入所者は「今日は薬を使わずに済んだ」と安堵の表情を浮かべた。でも明日になれば、「何度でもやめよう」として、失敗

薬物摘発者93人 覚せい剤が7割

県警10月末まとめ

山梨県警が覚せい剤取締法違反など薬物事件で今年摘発したのは10月末時点で93人、前年同期より1人多くなっている。薬物の内訳は覚せい剤が最も多く、全体の7割。覚せい剤の再犯率は高くなっている。昨年1年間のデータは67.5%で、過去10年で最高だった。

県警組織犯罪対策課によると、今年1～10月の薬物事件摘発者は、覚せい剤が最も多い66人、次いで大麻が18人、MDMAなどの合成麻薬が6人、アヘンが3人。合成麻薬の摘発者は過去10年で最多。年齢別で見ると、30代が28人、構成比30.1%、40代が25人、同26.9%、20代が20人、同21.5%など。未成年はいない。

昨年の覚せい剤取締法違反の摘発者83人のうち56人が再犯者だった。過去10年間の再犯率では、1999年の52.9%が最も低く、10年間で14.6%アップしたことになる。